円居（まとゐ）

令和6年1月29日(月)
備前市立備前中学校
校長 藤森 卓麻
0869-64-3365

2024年スタート

ー 平穏を祈りながら考える ー

新たな年がスタートしました。が、元日に能登半島で大地震が発生し、甚大な被害をもたらしました。始業式前には全校で黙祷を捧げました。やっと学校が再開したというニュースが届きましたが、同時に中学生の集団避難の話も。多くの人たちが復旧に関わってはいますが、まだまだ先の見通せない状況が続いています。

震災の発生直後は、報道等に触れ、いろいろなことを「思った」であろう生徒たち。三週間が経った今、今度は「考える」ことが大切です。私たちが現地の状況を知るには、報道やＳＮＳ等からの情報に頼るしかありません。そのＳＮＳでも偽情報や誤情報が飛び交っています。中にはかなり悪質なものも。情報の出所も見極めることが大切です。こんな状況で自分たちに何ができるのだろう。即座にボランティアで現地に入った著名人に対しても賛否両論があります。備前中の子どもたちはどう考えるでしょう。自分たちに何ができるのか。何をすべきなのか。直接関わることはできなくても、間接的に関われることはありそうです。募金の動きも生徒たちの中から出てきました。

また、違った視点で今の自分たちの生活に目を向けてみるのはどうでしょう。「当たり前のことが当たり前にできる」意味について考える。できるのにやらん、ではなく、目の前のことに一生懸命になっているか振り返る。そして考える。また、自分一人で生きているわけではないこと、いろんな人とのつながりの中で、助けられながら生きていることについて考える。いつもそばにいる家族のことを考える。

がむしゃらに何かに向かって進むのもいいが、じっくり立ち止まって悩んだり考えたりしている時も大事な時。今の中学生に意味のない時間はありません。

生徒たちがまだ生まれていない１９９５年の阪神淡路大震災から二十九年となった1月17日、被災地の神戸・東遊園地での追悼行事「1・17のつどい」が、今年も開かれました。毎回灯される「1・17」に並べられたキャンドルの灯。今年はその隣に「ともに」の三文字が加わりました。このつどいで、遺族代表としてことばを述べたのは、神戸市在住の鈴木佑一さん(34歳)です。この鈴木さんの「追悼のことば（全文）」をここで紹介します。文字にすると少し長いかもしれませんが、備前中の子どもたちにぜひ読んで、考えてほしいと思います。よろしかったら、ご家庭でも、読んでみてください。

※この度、「阪神淡路大震災1・17のつどい実行委員会事務局」から許諾を得て、この学校通信へ掲載をしています。

備前中HPから「学校の様子」がご覧になれます。

追悼のことば

震災の日、５歳の私と母と兄の３人は２階建ての神戸母子寮の建物の１階で生活していました。地震で建物が倒壊して私は生き埋めになっており、知らない人たちが私を助け出してくれて、靴を渡してくれました。母はその時すでに死んでおり、兄は無事でした。

震災後、２人は父親のもとに引き取られたのですが、私だけが児童養護施設に預けられました。その日から私と家族との時計の針は止まりました。施設で過ごしている間、父からの連絡があったのですが、金銭を要求するので金子理事長が私のことを守っていてくれていました。私が１８歳になる頃、父は家で孤独死していました。父とはほとんど会話することはありませんでした。高校を卒業後、金子理事長の勧めもあり大学に進学しました。その頃の私はすでに自分の中で家族とのつながりを切っており、心は何も感じなくなっていました。それは、私がこれからの人生を自分一人の力で生きていかなければいけないと気付き、そう決めたからです。当時の私はとても怖かったのです。一人でこのまま人生が終わっていくような気がして。そうはなりたくない怖さが私の唯一のエネルギーでした。生きるためではなく死にたくないから勉強する、トレーニングをする、バイトをする、そんな毎日でした。自分で手にする何かをがむしゃらに探していました。そうでないと不安で眠れないような日々でした。

そんな毎日を過ごしていくうちに、私は当時母子寮の職員であった岡本先生から、母の形見と手紙を受け取りました。手紙には、震災の後に私と父とを引き離してしまってごめんなさいと書かれていました。母がよく私を膝の上に抱っこしていて、私はこの子がいるから大丈夫とよく言ってくれていたと。寂しい時は鏡を見て笑ってごらん。ゆうちゃんの顔はお母さんそっくりだよと書かれていました。この時私は初めて母に愛されていたのだと実感できました。私はその当時先生に会うことができませんでした。かすかに先生の記憶を覚えており、すごく自分にとって良い方だと感じてはいたのですが、どうしても自分の中で会うことができなかったのです。当時の私は生きるためだけに必死で、誰も私の心の中に入ることができなかったのです。

（うらへ続く）

大学では自分の恩師となる先生と出会い、社会に出てからも仕事の域を超えて相談できる人たちも増えていき、本当に助けていただきました。私はこのような経験を経て、初めて困った時に人に素直に頼ることができたのです。困った時に助けてほしいと素直に言える。このことが人に感謝をするきっかけになりました。助けていただいたからこそ、困った時に自分ができる何かをしてあげたいと本当に素直に思えるようになったのです。このような人間関係が本当に自分にとって大切だと思い始めてきました。

そして私は３年前、岡本先生から私に会いたいと手紙をいただきました。その時私は、岡本先生から今まで私のことを心配してもらっていたことに初めて気づき、感謝しました。そして心から岡本先生に会いたいと思えました。先生と再会すると、本当に僕のことを心配してくれており、自分にとって大切な方だと実感しました。そして震災当時自分が住んでいた地域のことも教えてくれました。

私は自分の家族のルーツを探しはじめました。その途中でも多くの方々との出会いがあり、初めて自分の親戚に出会うことができました。親戚に、私にはもう一人の異父の兄がいることも知らされて、もう一人の兄とも会いました。異父の兄は母の墓に連れていってくれました。私は初めて母の墓に行くことができました。岡本先生はずっと私の実の兄のことも心配しており、兄のことについても話をしてくれました。兄は私に何もしてあげられなかったことに対して責任を感じており、今更どのような顔をして会えば良いのかが分からないと、自分は兄として私に会う資格がないと、泣きながら岡本先生に電話をしたそうです。私は人に感謝をすることを感じて生活していくうちに、震災があって兄が苦労したことも自然とわかるようになってきました。兄も実の母を亡くし、悲しい中あまり育児が得意でない父と一緒に暮らしていて苦労して当たり前だったと。そんな中でも私に対して責任をずっと感じて今まで生きてきたのだと思いました。

私は兄に会いたいと思い始めました。それは兄に幸せで生きていってほしいと伝えたいからです。私に何もできなかったことを悔いて生きてほしくない。胸を張って幸せに生きてほしい。これは私からしか兄に伝えることができないと思いました。私は兄の居場所を探しはじめました。そして多くの方の情報提供のおかげで兄の居場所がわかりました。私は兄に会いに行く前に金子理事長に相談しました。金子理事長は言いました。自分の中で抜けている家族の時間を埋めることは、これからの自分の人生を豊かにしてくれる。今の自分なら困った時に頼れる人もいるから自信を持って会いに行ってきなさいと。この言葉に本当に励まされました。私は１１月末ごろに兄と再会しました。私が兄に伝えたかったメッセージを伝えることができました。兄は会いに来てくれて本当にありがとうと言ってくれました。兄はとても優しく責任感の強い方でした。

今日１月１７日、私は初めて兄と一緒に母の墓参りに行きます。２９年前、止まった私の家族の時間が今日やっと動き始めます。ここまで私が生きてこられたのは、本当に多くの方に支えられお世話になったからです。今まで２９年間、私を見守ってくれた神戸実業学院の金子理事長をはじめ職員の方々、私の先輩後輩たち、ほんとにありがとうございます。今まで私と兄のことを心配してくれた岡本先生、本当にありがとうございます。震災の日、名前もわかりませんが私をがれきから救い出してくれた方々、本当にありがとうございました。あの日靴を差し出してくれた女性の方、本当にありがとうございました。ここでは名前をあげることはできませんが、それ以外の本当に多くの方々にもお世話になりました。ありがとうございます。

よく聞かれたことがあります。あの時震災が無かったらどうなっていたかと。私は震災で大切な母を失いました。しかし、震災の後に多くの素晴らしい方々に出会い支えてこられてきたことも事実です。私は今の自分がすごく好きです。それは、自分の人生にとって何が大切かを心から感じて日々生きているからです。周りに支えてくれる人たちがいる。そしてその人たちに感謝をして、何か少しでも恩返しをしていくために生きていく。私にできることは何か？自分が経験した震災のことを伝えて一人でも元気になってくれる方がいたらと思い、今日この場所に立たせていただきました。これからも私の人生でうれしいこと、悲しいこと、つらいことなどがたくさんあると思います。そこで新たに出会っていく人たちに感謝をして、日々生きていきたいと強く思っています。今日はこの寒い中、長時間私の話を最後まで聞いていただき皆様、本当にありがとうございました。

令和６年（2024年）１月１７日　鈴木佑一

（毎日新聞2024年1月17日掲載）